

39. 津田 純嗣氏（北九州商工会議所 会頭）

「構造として、5市の文化は残しつつ、メリハリのあるコンパクトな都市を。また、機能として、人材育成・供給力の高い都市を目指してほしい。そうすれば人も企業も集まる」



津田純嗣（つだ じゅんじ）

福岡市出身。

東京工業大学工学部機械学科卒業。(株)安川電機製作所（現・(株)安川電機）入社以降、米国安川電機取締役副社長、安川電機取締役ロボット事業部長等を経て、同社代表取締役社長、会長等を歴任。現在同社特別顧問、北九州市立大学理事長。2021年7月に北九州商工会議所会頭に就任（現在2期目）。

「5つのまちの文化は継承すべき」

北九州市が引き継ぐべきなのは合併前から今も残る5つのまちの文化です。これが残っていることは重要な財産ではないでしょうか。

一方で5つのまちの特徴が、独立的に残っており、都市構造にも影響を与えているため、市街地が冗長になっている点や、今も製造業を中心とした従前の産業構造が残っている点などは、今後改善していかなければならない課題とも言えます。

「人材育成・供給と脱炭素の拠点に」

人材育成・供給という意味ではベースとなる組織がしっかりしています。大学、高専のほか、産学連携の中心となっている北九州産業学術推進機構（FAIS）の存在も大きいでしょう。これらを生かして、人材育成・供給の拠点とするイメージで先鋭的に取り組んでいけばよいのではないのでしょうか。

土地のポテンシャルで言えば、鉄鋼業や化学工業で使われていた広大な土地があり、沿岸部はそれらに覆われています。その遊休地について、そのまま活用することは難しいかもしれませんが、脱炭素エネルギー化を進める拠点とし

てなどで発展的な使い方ができるのではないかと期待しています。

「職住近接とウォークブルで魅力化」

まちづくりについては、「小倉」の徹底した魅力化を行った方がよいのではないのでしょうか。文化・遊戯施設などを含めた都市として発展させ、それ以外の場所は住みやすい職住近接の場所と位置付ける。そのような区別をしっかりと、発展の方向性を描いてほしいと思います。

食、買い物、遊び、映画鑑賞等々、すべて「歩ける距離」にある小倉のまちは、とても魅力的です。初めて北九州市に来たとき、とても驚いたことを鮮明に記憶しています。

歩けるまち、すなわち、ウォークブルなコンパクトシティを実現するためには、モータリゼーションとは距離を置き、自動車道を減らして、歩道を拡幅するなどを進めてはどうでしょうか。少し先鋭化した取組を実施して、まちが変わろうとしている、というメッセージを市民にもアピールし、その効果を市民に実感してもらうことで、さらに先鋭化した取組ができる、といった循環をつくっていったら良いですね。

「IT 化推進に中等教育が重要」

今後は、一般的な方向性は、IT をはじめとするサービス産業に力を入れていくということになります。また、北九州市の特徴と言える製造業についても、IT 化を徹底して進めなければなりません。

これらを進めるためには、人材が重要になります。先ほどベースはしっかりしていると申しましたが、より若い世代の教育を考えなければなりません。具体的には子育て世代に、「子どもの教育を考えたら北九州に行きたい」と思ってもらわなければならないようになってきます。

福岡県をはじめ、九州は、従前から旧制中学の流れをくむ有力な県立高校が多くあり、人材の育成・供給源となってきました。旧制中学は5年制でしたが、今の中等教育は中高3年ずつ、大学に進学するには、2度の受験を経なければなりません。一方で、千葉県や神奈川県は、既に県立の中高一貫校を展開し、成功を収めています。福岡県も公立校が元気なうちに手を打たなければ、取り返しのつかないことになるという危機感を持っています。

「IT 人材の需給ギャップを埋める必要」

産業の現場では IT 人材が圧倒的に不足しています。製造業の底上げのためにも IT 化は必須です。現在、リスクリングへの関心が高いのも、現場の危機感からくるものだと思います。

そこで、他の都市を圧倒するような人材育成をし、それを期待して他の都市から企業が来る、という流れをつくる必要があります。IT 企業を呼び込む活動も必要ですが、進出企業からすれば人材が確保できるのか、というのが一番気になる点です。今、北九州市において、地元で就職を希望している人と実際に就職している人との間にはギャップが生じています。IT 関係や事務関係が少なく、これらの志向の人が地元で就職したくてもできない状況です。IT 人材の育成と IT 企業の誘致は、需給ギャップを

埋めるという意味もあります。今は多くの学生が卒業後に市外に出ていくパターンになっているので、そこを良い循環に持っていく必要があるのではないのでしょうか。

「人材供給力の高いコンパクトシティに」

北九州市が目指して欲しい姿を一言で言えば「コンパクトシティ」です。その理由は、職住近接が可能な点や5市合併により市街地がやや冗長気味になっている点などを踏まえ、コンパクトシティになっていくことがふさわしいと考えているためです。

もう一つ挙げるとすれば、繰り返しになりますが、「人材育成・供給力のあるまち」。その理由は、産業転換・発展を図っていく中で人材が一番重要であると考えためです。北九州市には技術者の厚いベースも、高等教育機関や人材をコーディネートする機能もあります。人材供給力が高まれば企業は集まり、企業が集まれば人も来るようになるといった好循環がきっと生まれることとなるでしょう。